彼岸花にみる生活世界

――命名と名称分布から――

Lifeworld seen in Lycoris radiata :
From the viewpoints of naming and distribution of names

川名　瑞希

はじめに

今日の日本において、初秋を彩る植物のひとつとして彼岸花は大きな注目を集めている。花の咲く季節になると群生地へ多くの人々が観賞に訪れるため、地域振興の素材としても人気を博しているといえるであろう。しかし、もともと彼岸花は観賞目的に植えられ管理されるような植物ではなく、人里の様々な場所に生息しているごくありふれた植物のひとつなのであった。

それでは、彼岸花とは本来どのように扱われてきた植物なのであろうか。本稿では人によって与えられた彼岸花の様々な名称から、その背後にある意識のあり方を読み取っていく。また、生活の中で利用価値を見出され、重要な植物とされていた点についても、言語地図をもとに明らかにしていきたい。

Ⅰ　彼岸花の概要

1．彼岸花という植物

彼岸花は中国を原産とし、やがて日本に定着した帰化植物である。伝来の時期や方法、目的は未だ明らかにされていないが、冷涼な気候である北海道、

東北地方を除く日本各地に広まった。特に近畿地方、中国地方に多く分布している［環境庁編 1994］。

球根性の多年草で、一度植えると毎年同じ時期に、同じ場所で花を咲かせ、葉を出す植物である。開花時期になると人の膝丈ほどの長い茎を出し、その先端に反り返った赤く細長い花弁と、長い雄しべ・雌しべを持つ花を複数輪生させる。日本で一般的に見られる品種は球根の分球で繁殖し、種子を作らない。球根は強い毒を持ち、茎から出る汁も皮膚に対して刺激性がある。開花期間は短く、１～２週間程度である。葉を出している期間も限定されているため、時期によっては地表に何も出現していない状態になる。

２．彼岸花の名称をめぐって

彼岸花の日本への伝来時期は明らかではないが、遅くとも室町時代頃までには伝来したと考えられている［松江 2008：4-5］。伝来後、この植物には様々な地域で命名が行われ、多様な名称が確認されている。

現在、一般的に使用されている名称は「ヒガンバナ」と「マンジュシャゲ」である。2010 年から 2015 年にかけて行われた国立国語研究所の共同研究「方言の形成過程解明のための全国方言分布調査」の結果からは、これらの名称が全国に広く使用されていることがわかる［大西編 2016］。図１ではこの２語の分布を略図化して概観を示した。

「ヒガンバナ」は秋の彼岸に由来する名称であり、現在は標準和名として使用されている。全国どこでも彼岸の時期に、示し合わせたように花を咲かせることから命名されたと考えられる。一方、「マンジュシャゲ」は法華経に登場する花の名称を由来としている。良い兆候を表す花の名称であるため、神聖な印象を与えると好んで使われることも多い。この２語が全国に広く浸透したのは、全国の人々が共通して持つこの植物への認識や印象と合致した、受け入れやすい名称であったからであろう。

しかし、これらが全国に共通して使用されるようになった歴史は浅いと考えられる。彼岸花についての記事を掲載した江戸時代の『訓蒙図彙』［中村編 1666］、『和漢三才図会』［寺島 1990］での項目名は中国での「石蒜（セキサ

図１　「ヒガンバナ」と「マンジュシャゲ」の分布の概観（[大西編 2016：35] をもとに筆者作成）

ン)」という名称であり、「ヒガンバナ」も「マンジュシャゲ」も別称として紹介されている。だが現代において全く馴染みのないこの「石蒜」が一般的な名称であったとは考えにくく、これらが書かれた当時は通称が存在していなかったと推測できる。

つまり、全国共通の名称が使用される以前は、この植物と接しながら暮らす人々がそれぞれの認識に基づいて名称を与えていたと考えられる。そのため、彼岸花には数々の名称が確認されるのである。これらの名称からは、自然環境をごく身近に感じていた人々が、この植物をどのように評価していたかが読み取れるのである。

Ⅱ　彼岸花の名称に関する先行研究と問題の所在

1．先行研究

全国各地で様々な名称が確認されている彼岸花には柳田國男も強い関心を示していた。『野草雑記』における「草の名と子供」では、幼少期の自身の記憶を交えて彼岸花という植物と生活との関わりについて言及している。郷里で使用されていた名称と各地で収集した名称の整理をすると共に、その由来の考察をし、彼岸花に興味を持つ子供と、それを咎める大人との異なる価値観を指摘した［柳田 1962］。

その他にも、彼岸花の名称をめぐっては様々な整理、分析が行われてきた。数多くの名称を項目立てて整理を行ったのが、山口隆俊と松江幸雄である。山口は「彼岸花の方言」において、その名称を①宗教、②毒性と病気、③花の性質、④人間、動物、⑤遊び、⑥他の植物、⑦意味不明という７つの項目に分類した[1)]［山口 1956］。後に松江も著書『日本のひがんばな』でほぼ同様の分類を使用し、名称の整理を行っている［松江 2008：21-22］。これらの分類は名称の由来や意味内容から設定されたものであり、彼岸花の名称を整理するものとしては非常に有用であるといえる。

名称の分布についても、山口が都道府県ごとの名称数を表に示しており、その偏りについて言及している（図２）［山口 1956］。篠木れい子も「ヒガン

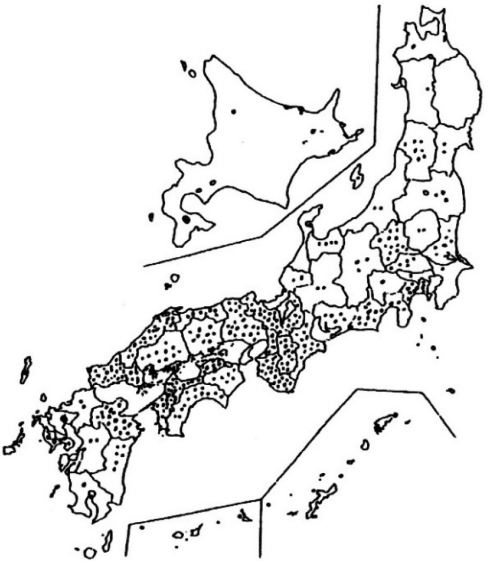

図３　都道府県別にみたヒガンバナの方言語彙量の概観［篠木 2007］

三重	岡山	徳島	香川	静岡	島根	高知	大分	奈良	兵庫	愛媛	山口	和歌山
13 (6)	14 (9)	16 (6)	24 (3)	24 (5)	29 (10)	32 (9)	35 (12)	35 (8)	41 (9)	61 (2)	62 (6)	79 (7)
神奈川	鳥取	千葉	大阪	埼玉	宮城	茨城	長崎	愛知	新潟	広島	京都	群馬
5 (0)	6 (0)	6 (1)	6 (1)	7 (1)	7 (1)	8 (6)	8 (4)	8 (4)	8 (4)	10 (1)	12 (7)	13 (2)
北海道	福島	青森	福岡	佐賀	福井	宮崎	滋賀	岐阜	東京	石川	栃木	長野
2 (0)	3 (0)	3 (0)	5 (2)	5 (2)	5 (3)	4 (1)	4 (2)	4 (3)	4 (0)	4 (4)	4 (1)	5 (2)
熊本	秋田	岩手	明地区不	沖縄	西国	中国	東国	武州	富山	山梨	鹿児島	山形
0	0	0	(6)	2 (2)	(1)	(5)	(1)	(3)	1 (0)	2 (1)	2 (0)	2 (1)

図２　都道府県ごとの名称数［山口 1956］
※（）内は詳細な郡市不明な名称数

バナの謎と方言」において各地の名称の偏りを指摘し、地図上に示している（図３）［篠木 2007］。これらの分析から、彼岸花の地方名は近畿地方、中国地方、四国地方を中心とした西日本に特に多くみられることが明らかにされた。それぞれの地域にどのような地方名が広まっているかという点については、前述した国立国語研究所の共同調査で言語地図が作成されている。

２．問題の所在

これらの先行研究は彼岸花の名称に注目し、分類や分布状況の確認を中心に行ったものである。だが、柳田が「草の名と子供」で言及したような、彼岸花の名称の意味内容や命名の意図について分析する論考はあまりみられない。彼岸花の名称は他の様々な単語を比喩的に用いた複合語であるものが多く、選択された単語の意味内容を分析することで、命名の背景に隠れている生活の知識など様々な情報を得ることが可能である。このような視点から名称をみることは重要であり、より多くの考察が行われるべきであると考える。そこで、本稿では先行研究をまとめ、筆者の分析も加えながら、彼岸花に様々な名称が与えられた当時の生活世界のあり方について議論していく。

Ⅲ　名称から生活を読み解く

本章では彼岸花に与えられた具体的な名称を挙げながら、その名称が付与されるに至った経緯や、命名者の意図を検討する。また、検討にあたっては、人々が彼岸花をどのように認識し、どのような関わり方をしていたかということを読み取れる名称について、自然観察、植物利用、植物への印象といった観点から考察を行うこととしたい。

１．自然観察に基づく植物認識

山口の分類のなかで「花の性質」にあたる名称は、見た目や他の植物と比較した際の特異性などに着目して名付けられたものである。花の色に由来する「アカバナ」や、細長く反り返った花弁や葉の形に由来する「カミソリバ

ナ」など、外見に関わる名称がみられる。

しかし、ここに分類される名称において注目すべきは、「ハミズハナミズ(葉見ず花見ず)」とそれに派生する名称である。この名称は花が咲く時期に葉がなく、花が枯れた後に葉が出るという他の植物と異なる彼岸花の生育の特徴を表現したものである［大西編 2016］。また、この「ハミズハナミズ」と同じ内容を意味する「ハヌケ」や「ハッカケバナ」という名称もある。この名称を発音した際の音である「葉」が「歯」と同様であることから「ハヌケババア」といった名称も存在し、「口に入れると歯が抜ける」といった俗信の由来にもなっていると考えられる［篠木 2007］。

「アカバナ」などが彼岸花の目に見える様子を表象した名称であるのに対し、これらの名称は目に見えない特徴を表しているといえる。花には葉が伴うもの、という認識が植物と接しながら生活する人々の間で常識として持たれていたからであろう。このような自然に対する観察眼を持っていたため、他の植物とは異なる彼岸花の生育サイクルの奇妙さに強い興味を抱いたのではないだろうか。その特徴と名称から俗信が生じていることからも、その注目度がうかがえる。

2．生活での密接な関わり

前述した通り、彼岸花は強力な毒性や刺激性を持つ。だが危険な側面を持つ一方で、彼岸花は様々に活用されてきた植物であった。その球根の毒を利用すれば土を掘り荒らす動物への対策になると考えられ、農地の畦や土葬を行っていた頃の墓地などに植えて活用されてきた。また、水にさらして毒抜きすれば澱粉質を食用にすることも可能であったため、救荒植物として記載している文献や、実際に食していた記録も多く残されているほか、民間療法の薬とする利用目的もあった［松江 2008：17-19］。このように様々な場面で活用されていたため、彼岸花は生活の中で身近な植物となったのであろう。

子供たちの遊び道具にされることもしばしばあり、「ジュズバナ」や「オリカケバナ」は長い茎を折り数珠のように繋げたものを作って遊ぶことをいい［柳田 1962］、「チョーチンバナ」は茎を折り、花をぶら下げて持って遊ぶこ

とをいう［栗田 1998：23］。彼岸花が子供の注目も集めていたのは、目立つ植物であったが故であろう。これらの遊びに関する名称からは、子供との関わりも深かったことがわかる。

だが、毒性や刺激性のある植物に子供が触れるのは大人にとっては好ましい事ではなかったため、名称に危険性を表現して彼岸花への忌避意識を持たせようとしたのであろう。山口の分類における「毒性と病」の名称は、強烈な印象を与えるものばかりである。例えば、直接的に「毒」を名前に付けた「ドクバナ」は全国の様々な地域で用いられている［八坂書房編 2001：462-463］。また、「シタマガリ」という名称は子供が口に入れないよう脅し文句として与えられた名であるといえる。触ると皮膚を刺激することから「テクサリ」や「テハレ」などの名称も多くの地域で使用されている。

３．死の印象への関連付け

以上のような名称は、植物の持つ具体的な特徴や、人間と植物の直接的な関わりを経て命名されたものだといえる。だが、それらと異なる特徴を持ちながらも数多くみられる名称に「シビトバナ」、「ソウシキバナ」、「ユーレイバナ」、「ジゴクバナ」などがある［山口 1956］。これらの名称も全国各地で確認されているが、比喩的に用いられている単語はどれも死や死後の世界といった非日常を連想させるものばかりであり、聞けば恐怖や不吉な印象を感じさせる。

それでは、なぜ日常生活の中でこのような名称が生まれ、多くの地域で使用されてきたのであろうか。それは、Ⅲ-１で挙げたような自然観察や、Ⅲ-２で挙げたような生活との関わりを通して生まれた印象や認識が、このような不吉なものであったからだといえる。

彼岸花を墓地に植え、獣害対策とした利用方法については前述した。かつて墓地は、屋敷や農地の一角などの生活圏内に設けられる屋敷墓の形態が各地で見られた［森 1993：85］。そのため、墓地は現在よりも身近な存在であったといえる。このような墓と共に彼岸花を目にする機会も多かったため、「墓地の花」と認識され、さらに墓地から死を連想したことが、これらの

命名の大きな要因ではないかと考えられる。

加えて、秋の彼岸という死者を偲ぶ行事の時期に決まって開花することや、毒性などの危険性に対する忌避意識、災害時に食する習慣、燃えるような赤い花を咲かせた後に魂が抜けるかのようにしぼむ姿なども相まって、不気味で不吉な植物とされるようになったのであろう。そしてこれらの印象は非常に強く持たれるようになり、死を連想する植物としての側面を現代においても残し続けている。

４．小括―命名を行うための強い関心

以上の考察からは、彼岸花の名称はその土地で生活するなかでの自然観察や自然に対する知識、当時の生活状態や精神状態などに基づいて命名されていることがわかる。

野生の植物は自身の管理する土地に当たり前に存在していたもので、人々はこれらをうまく活用する方法を考え、生活の一部に組み込んでいた。名称が誕生し、定着するためには、このような生活上の利用、または厄介者として注視するなど、その植物が生活に深く関わっていたという背景が不可欠である。

つまり、生み出された名称の数が多いものほど、生活との関わりが深いといえるだろう。彼岸花に多くの名称や象徴性が与えられたことを鑑みると、強くその存在が意識されていたことがうかがわれる。

次章では、彼岸花という植物が全国へどのように広められ、受け入れられたかという点についてみていきたい。

Ⅳ　名称分布にみる彼岸花と生活の関わり

１．彼岸花の伝播

これまでの考察から、彼岸花には種々の名称が与えられ、様々な地域で身近な存在であったことがみてとれた。だが、この植物は意図せず全国に広まった、というようなことは考えにくい。なぜなら彼岸花はその生態的特徴

から、人による働きかけなしでは全国規模に広まることはできないからである。

ここでⅠ－１の概要で触れた、日本で見られる品種は種子を作らないという性質が重要になる。つまり、彼岸花は植物自体の持つ繁殖力では生息域を広範囲に広めることができないのである[2)]［松江 1990：5］。人里においても生息地は限定的で、田畑の畦や墓地、路肩がその中心地であり、人の出入りの少ない山岳部にはほとんど生息しない。そのため、彼岸花は人の生活圏内に特徴的にみられる「人里植物」のひとつとされている。

それでは、なぜ彼岸花は全国各地に広められ、数々の名称を与えられるに至ったのだろうか。そこからは、この植物を利用するための強い目的意識を見出せる。Ⅲ－２で挙げたように、彼岸花には様々な利用方法がある。生活のなかで役立つうえに、管理コストも低いため積極的に植えられたのであろう。つまり、本来は利用目的をもって植えられた、半栽培植物としての側面を持っていたといえよう。野生の植物として認識されるものも、元を辿れば必要に応じて畦や墓地に植えられた結果であったと考えられる。危険な植物という認識を持たれながらも、駆除されずに残り続けているのは、身近に置いておくだけの理由がこの植物にはあったということではないだろうか。利用価値の高い植物であったからこそ、彼岸花は全国に広められ、定着するに至ったのである。

２．彼岸花の名称分布の特徴

以上を踏まえたうえで、次に全国各地の名称がどのように分布しているかを確認し、この植物が人の手を介していかに全国に広まったかをみていきたい。先に挙げた国立国語研究所の共同研究による調査では、彼岸花の地方名について調査が行われており、回答数 211 件、61 語の分布が地図上に示されている［大西編 2016］。

紙面の都合上、言語地図の全体を引用することはできないが、様々な種類の名称がみえる近畿地方・中国地方周辺を抜粋して確認する（図４）。「キツネバナ」などの動物に例えた名称[3)]は近畿地方と中国地方に広い範囲でみら

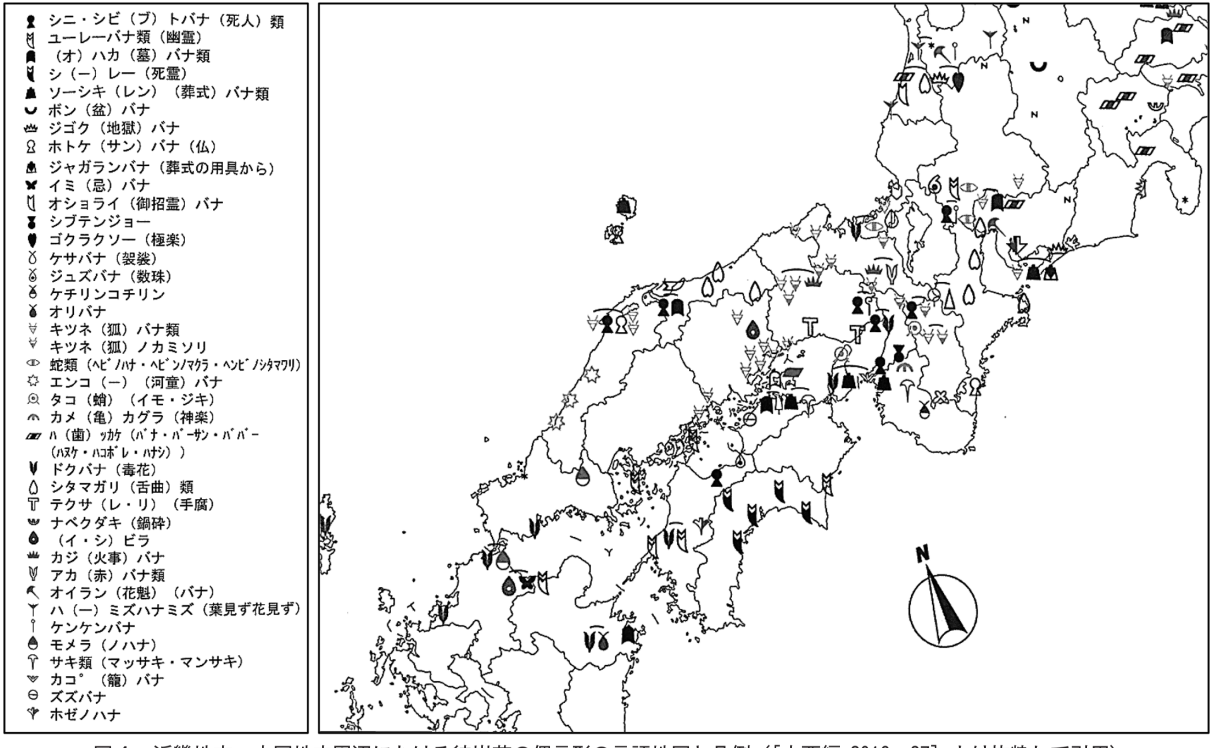

図４　近畿地方・中国地方周辺における彼岸花の俚言形の言語地図と凡例（[大西編 2016：37] より抜粋して引用）

れ、「シレー」[4)]は高知県に限定してみられるなど、個々の名称に集中的な範囲で分布する傾向が確認できる例もある。その要因として、これらの集中がみられる地域間では、頻繁にコミュニケーションが行われており、日々の生活の様相や生活上の意識も類似していたことが推察できる。人々の間で共通した生活意識がなければ、ものに対して共通した名称は用いられないであろう。

しかし、このようなまとまりはありつつも規模としては小さく、全国的な範囲に視野を広げれば、様々な名称が点在しているといえる[5)]。また、名称の特性ごとにまとめた場合も分布の偏りは少なく、彼岸花に対する認識は各地に分散しているといえる（図５）。加えて複数の語を併用している地域も多い。各地で様々な名称がみられることから、命名は生活と深く関わるなかで絶えず行われていたと推測できる。そこからさらに複数の名称が、人から人へと伝わり、別の地域へと広まることで、入り混じりながら定着していったのであろう。

３．今後の研究における名称分布の活用―死の印象の分布と墓地

図５を見ると、Ⅲ-３で挙げたような死を連想させる名称が全国的にみられる。前述の通り、これらの名称が与えられた要因には、屋敷墓との関連が考えられる。では、これらの名称が全国各地にみられることからは何が読み取れるのであろうか。

かつて屋敷墓を設ける習慣は全国各地でみられたが、これらの墓地は明治時代の墓埋政策によって廃止され、その姿を消していく［森 1993：84］。現代では墓は一か所に集められ、屋敷墓の痕跡を確認することは難しくなっているであろう。しかし、人の手によってその周囲に植えられた彼岸花や、彼岸花に根付いた「墓地の花」という印象は残り続けていると考えられる。

そのため、家の周りに彼岸花を植えている地域や、死や墓地を連想させる名称を用いる地域では、かつて屋敷墓を設ける習慣があったことを想定することも可能なのではないだろうか。本稿においては未だ推測の域を出ていないが、このように名称分布は地域間での共通点を見出す手掛かりにもしてい

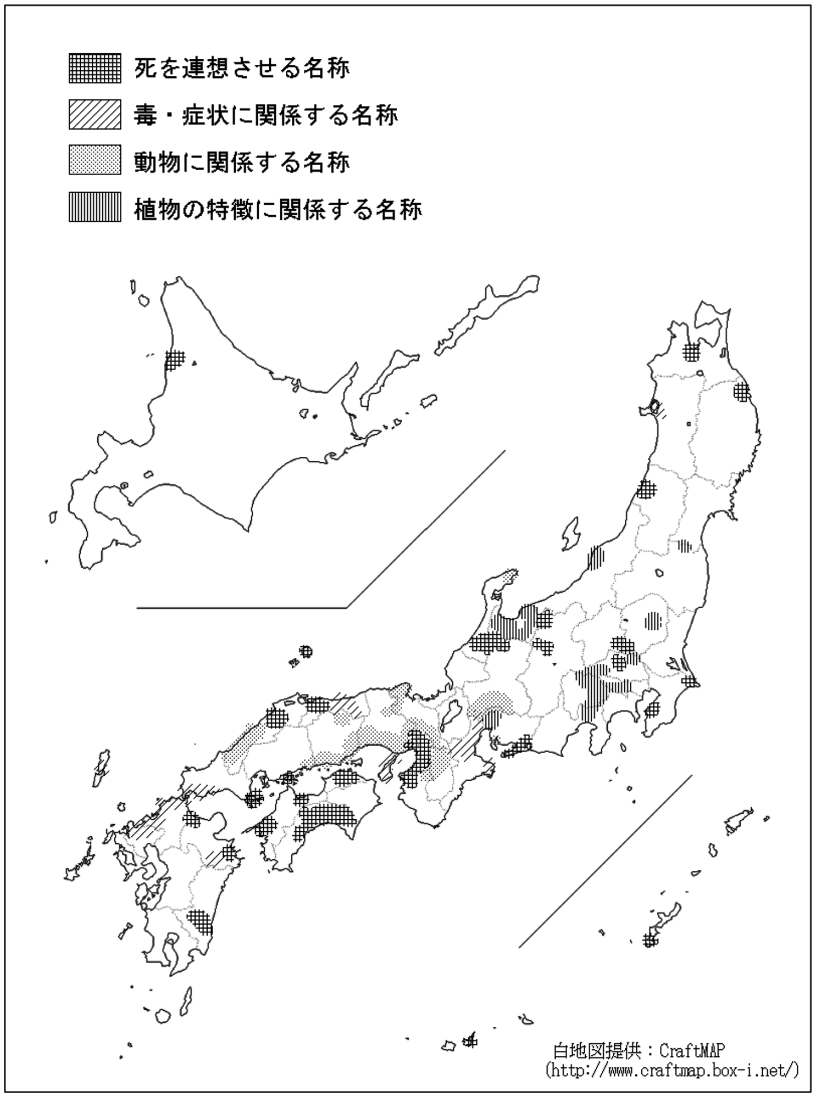

図５　彼岸花の別称分布の概観（[大西編 2016：37] の言語地図をもとに筆者が名称を再分類し、作成）

けるように考える。今後はこれらを実証的に明らかにすることを課題としていきたい。

おわりに

以上、彼岸花の名称とその分布から生活の様相や背後にある人々の意識について検討してきた。彼岸花は人々に利用されるなかで、価値や印象を付与されてきた植物であるといえる。また、共通した名称を用いている地域間での関係性や共通性という点についても、考察していくことが可能であろう。彼岸花の認識をさらに辿っていくことで、自然と深く関わりながら生活するうえでの意識をより深く理解できると考える。

本稿では彼岸花を事例として考察を行ったが、同様の分析は様々な野生植物を対象にしても可能である。篠木は草木に対する命名行為について、「生活人が単刀直入にその姿を表現したり、何かを連想するにしても、生活に根付いたところでの連想であるのが一般的」な傾向であるとし、植物に何を連想したのかという点から生活を読み取ることができると述べている［篠木2007：66］。命名行為そのものの研究蓄積については本稿では触れられなかったが、彼岸花という植物の事例がそのなかでどのような価値を持つものであるのかという点についても今後、考察を重ねていきたい。

しかし、彼岸花というひとつの植物に対する命名を例にみていくだけでも、生活世界の様々な側面がみえてくる。日本には膨大な野生植物が存在しており、それぞれが多様な特性を持っている。それらに与えられた名称とは、命名時の生活世界を理解していくうえで非常に重要な手掛かりになるといえる。特に野生植物は、ハレの儀礼や行事に用いられる植物以上に日々の暮らしと密接に関わりながら存在しているため、その分析から、より日常的な生活世界に迫っていくことが可能となるだろう。

注

1） 山口らの分類法では各名称の意味内容の把握が重要となるが、分類者間で齟齬が生じている

という問題がある。しかし、名称の分類方法自体については本稿の趣旨から外れるため、ここでは言及しない。

２） 河川の氾濫などで他所へ運ばれ、人の手を介さず生息域を増やす場合もあるが、これによっても全国規模に広まることは困難だと考えられる。

３） 図４の凡例における「キツネ（狐）バナ類」から「カメ（亀）カグラ（神楽）」までの名称。

４） 図４の凡例における「シ（ー）レー（死霊）」。

５） 比較対象として、同調査における「かぼちゃ」の言語地図では、地方単位での地域区分が可能なほど大規模な名称分布のまとまりが確認できる［大西編 2016：31］。

参照文献

大西拓一郎編

2016『新日本言語地図―分布図で見渡す方言の世界―』朝倉書店。

環境庁自然保護局計画課自然環境調査室編

1994『自然環境保全基礎調査－環境指標種調査－調査結果報告書』環境庁自然保護局計画課自然環境調査室。

栗田子郎

1998『ヒガンバナの博物誌』研成社。

篠木れい子

2007「ヒガンバナの謎と方言」『日本語学』26：61-69、明治書院。

寺島良安

1990『和漢三才図会』島田勇雄ほか（訳注）、16 巻、平凡社。

中村惕斎編

1666『訓蒙図彙』14 巻、山形屋（国立国会図書館デジタルライブラリ）。

松江幸雄

2008『日本のひがんばな』文化出版局。

森健二

1993『墓と埋葬の社会史』講談社。

八坂書房編

2001『日本植物方言集成』八坂書房。

柳田國男

1962『野草雑記』角川文庫。

山口隆俊

1956「彼岸花の方言」『言語生活』54：56-59、筑摩書房。